

線状降水帯発生予測の活用

気象庁は6月15日、東北地方が梅雨入りしたとみられると発表し、梅雨のない北海道を除くすべての地方で梅雨入りとなりました。また、同庁は今季から線状降水帯による大雨の呼びかけを開始していきます。本格的な出水期を迎え、今一度日頃の備えの点検をお願いいたします。

1. 2022年の梅雨の傾向

- 各種気象情報の予報によれば、今年の梅雨の時期の降水量は平年並みか、平年より少ない予想です。ラニーニャ現象(*)の影響で例年より梅雨明けが早くなるとの予報も出されていますが、梅雨の期間が短くても集中豪雨となることもあり油断は出来ません。今年のようにラニーニャ現象が発生している状態の梅雨は、インド洋からインドネシア付近で大気の対流活動が活発になり、雨雲のもととなる暖かく湿った空気が日本付近に流れ込みやすくなります。6月下旬から7月前半にかけては前線活動の活発化が想定され、日本では毎年6月下旬から梅雨の末期にかけて大雨による災害が起きていますので、日頃から大雨への備えをしておくことが大切になります。

(*) ラニーニャ現象：太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて、海面水温が平年より低くなり、その状態が1年程度続く現象です。

2. 気象庁の気象情報

- 気象庁では6月1日から線状降水帯による大雨の可能性が高いことが予想された場合に、半日程度前から「線状降水帯」というキーワードを使って呼びかけることとなりました。
- 線状降水帯は、次々と発生する発達した雨雲(積乱雲)が列をなし組織化した積乱雲群によって、数時間にわたってほぼ同じ場所を通過または停滞することで作り出される、線状に伸びる長さ50~300km程度、幅20~50km程度の強い降水をとまなう雨域のことをいいます。
- 線状降水帯が発生すると大雨災害発生の危険度が急激に高まることがあります。近年では2014年の広島市での土砂災害が、線状降水帯の停滞も要因の一つと言われています。
- この線状降水帯の発生予測は非常に難しく、この呼びかけがあっても必ずしも線状降水帯が発生するわけではないですが、発生しなくても大雨となる可能性が高い状況となります。気象庁から発表される全般気象情報などに「線状降水帯」のキーワードがあれば、より警戒を強めていただくことが重要です。

3. 対策マニュアルの策定

- 災害への対策として、警戒情報が発令されたことをトリガーとするタイムラインマニュアル(時系列フロー・工程別マニュアル)を策定し、マニュアルどおりに動けるかを平時から訓練しておくことが肝要です。
- マニュアル策定においては、「Step1:対象災害と災害状況の想定」「Step2:防災行動の抽出と整理」「Step3:時系列の整理」の順でご検討頂くと抜け漏れを防ぐことができます。

弊社でも自然災害対策に関し各種ご支援をしております。ご不安なこと等ございましたら営業担当者までお声掛けください。



【参考ウェブサイト】ウェザーニュース：<https://weathernews.jp/> tenki.jp：<https://tenki.jp/>

気象庁：https://www.jma.go.jp/jma/kishou/knownow/bosai/kishojoho_senjokousuitai.html

本Topicsに関するお問い合わせ、ご意見、ご感想等ございましたら、弊社営業担当までお寄せください。

編集にあたっては万全の注意を行っていますが、本Topics情報の正確性を保証するものではなく、これにより生じたい

かなる損害に対して弊社は一切の責任を負わないものとします。

